

令和元年6月18日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K13375

研究課題名（和文）明治期歌舞伎における戦争劇の研究～西南戦争を中心に～

研究課題名（英文）A Study on War Dramas of Kabuki in Meiji Era - With A Focus on Satsuma Rebellion

研究代表者

埋忠 美沙 (umetada, misa)

早稲田大学・文学学院・講師（任期付）

研究者番号：20468846

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：西南戦争劇の詳細とその後の戦争劇への影響を詳らかにするとともに、演劇において西郷の造形が確立する経緯を詳らかにした。

終戦直後に上演された西南戦争劇は、新聞種と強調して時事性が強く、軍服の着こなしを重視し、漢語を使用していた。すなわち戦争の写実であることを重視しており、当時の歌舞伎は報道メディアとしての役割を果たしていたといえる。一方西郷の造形は、キワモノとしての西南戦争劇が明治30年代半ばに断絶したことを境に、大きく変化していた。その理由は、明治初年から受け継がれた西郷の造形が上野の銅像完成後（明治31年）は通用しなくなったため、強力な視覚イメージが演劇に与えた影響が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は明治演劇史の盲点となってきた西南戦争劇の研究を通じ、「歌舞伎は近代戦争を表現できなかった」という通説を見直すとともに、戊辰戦争から西南戦争を経て、日清日露戦争にいたる戦争劇の大系化の一助となった。

また西郷隆盛の造形について、明治初年から西南戦争や銅像建立を経て現在へ至るまでの変容の過程を、演劇を通じて詳らかにした。これは歴史研究や美術研究にも結びつく成果であり、演劇研究にとどまらぬ意義があった。

研究成果の概要（英文）： War dramas based on Satsuma Rebellion that staged soon after the rebellion were emphasized as news-matter with strong topicality, and paid attention to the usage of military uniforms and Sino-Japanese vocabulary. It can be said that they were emphasized to be as realities of the rebellion, and kabuki had played a role as news media at the time. However, the characterization of Saigo had changed greatly since the extinction of war dramas based on Satsuma Rebellion as trendy productions around the middle of the 1890's. The reason is that the characterization of Saigo inherited from the early years of Meiji era was no longer acceptable since the bronze statue of Saigo in Ueno had been finished, which showed the influence of the powerful visual image on theatre productions clearly.

研究分野：歌舞伎

キーワード：歌舞伎 戦争劇 西南戦争 西郷隆盛 新派 九代目市川団十郎 河竹黙阿弥

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究で扱う「戦争劇」とは、その名の通り戦争を題材とした演劇のことで、時局や同時代の風俗を題材として取り込んだ際物的一种である。泰平の世であった江戸時代が終わり明治時代になると時勢に添った戦争劇が興隆し、戊辰戦争・西南戦争(内乱)・日清戦争・日露戦争(対外戦争)が芝居の題材となった。これら戦争劇の眼目は、視覚と聴覚を多分に刺激した迫力ある戦闘の表現である。さかのぼれば、近代以前は戦争が直接表現されることはなかった。むしろ江戸時代にも源平合戦や大坂の陣など、歴史上の戦争を題材とした歌舞伎はあったが、それらの作品では「物語」や「注進」など、長台詞によって戦闘を表現する演出が用いられた。すなわち戦場そのものを舞台上で表現したのは明治以降のことであり、激しい戦闘場面を伴った戦争劇は近代の産物なのだ。

研究史をたどると、従来の日本演劇史でもっとも注目を集めてきた戦争劇は、日清戦争を題材とした芝居である。明治 27 年に日清戦争が勃発すると各座がただちに芝居に仕組み、日清戦争劇は劇壇を席卷した。その様子を、日本演劇研究を牽引した河竹繁俊は『日本演劇全史』(昭和 34 年)において次のように記した。

技芸はへたでも、舞台上で火薬を破裂させ、殺伐な戦闘を見せる新派特異の無鉄砲な芝居の方が、この時ばかりはその生々しい報道性と、戦争気分にあった文句なしの痛快さにより、絶対の勝利を得たのはうなずける。(中略)ここで歌舞伎は、いわゆる散切物的な新作と、活歴的写実主義はもはや新演劇に任すべきものであり、自らの可能性の限界をこえたものであると感じ、諦めてしまったように思われる

すなわち「歌舞伎 VS 新派」という構図のもと、歌舞伎が古典化した要因として日清戦争の表現を巡る歌舞伎の敗北を指摘した。すなわち明治 20 年代に川上音二郎による新派(書生芝居)が台頭したが、戦闘の表現については歌舞伎の様式とは無縁の新派が適していた。日清戦争劇における新派との対決によって歌舞伎の近代劇としての限界が露見し、以後古典化の道を辿ったとする。この説は、大笹吉雄『現代日本演劇史』(昭和 60 年)や神山彰『近代演劇の来歴』(平成 18 年)などの明治演劇に関する代表的な論考に受け継がれ、長らく演劇史の通説となってきた。

しかし申請者は、日清戦争において新派が衝撃を与えたことは事実でも、そこから導かれた「歌舞伎は近代戦争を表現できなかった」という通説は観念的な見方だと考える。すなわち、「歌舞伎が明治末から古典化した」という演劇史を補強する手段として、戦争劇をいささか都合よく解釈していると思われるのだ。本研究は、こうした日本演劇史の事情を背景に確立した「歌舞伎は近代戦争を表現できなかった」という通説の見直しを企図して計画したものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、明治演劇史の一大ジャンルの戦争劇を大系化することである。戦争劇は古くから注目されてきたがその研究対象は戊辰戦争と日清戦争に限られている。戊辰戦争当時の歌舞伎は様式的な表現を止めており、日清戦争になると新派が台頭したため、演劇史においては長らく、歌舞伎が近代戦争の迫力ある戦闘を表現できなかったと論じられてきた。しかし二つの戦争の間に位置する西南戦争に注目すると、歌舞伎は近代戦を象徴する諸要素をリアルに表現し、迫力ある舞台を見せていたと考えられる。本研究は明治演劇史の盲点となってきた西南戦争劇の研究を通じ、「歌舞伎は近代戦争を表現できなかった」という通説を見直すとともに、戊辰戦争から西南戦争を経て、日清日露戦争にいたる戦争劇の大系化を目指すものである。

第二の目的は、薩軍の大將・西郷隆盛の描写を明らかにすることである。江戸時代は徳川幕府に敵対した人物を描写する際は細心の注意が必要であった。すなわち封建体制を揺るがしかねないため、その人物を肯定することは不可能であった。徳川幕府から明治政府に変わり、公権力に関わる事情はいかに変わったのか、あるいは変わらなかったのか。また、西郷隆盛のイメージとして今日一般的なものは、短い着流しで犬を連れ兎狩りする姿だが、それは明治 31 年除幕の上野公園の銅像が確立したといえる。今日まで受け継がれるこのような牙を抜かれた西郷のイメージは、明治政府の思惑によって形成されたものだが、明治 11 年に上演された西南戦争劇を詳らかにすることによって、銅像建立以前の西郷のイメージを明らかにしうる。西南戦争劇の分析を通じてこれらの事情を詳らかにすることを目指す。これは戦争劇にとどまらぬ意義があるものである。

3. 研究の方法

本研究は四段階で進行する。第一に西南戦争劇の上演年表の作成。地方の小劇場や後世に上演された作品も含め、網羅的な年表を作成する。

第二に上演年表に基づく作品の調査・分析。西南戦争直後に上演された作品とその後の西南戦争物を対象に、台本・新聞記事・番付・草双紙などの資料収集とその分析をおこなう。注目するのは主に戦闘場面の演出と、西郷隆盛の描写である。なお対象とする作品は上演年表の調査結果によっては増える可能性がある。

第三に、「歌舞伎は近代戦争を表現できなかった」という通説の見直しのため、戦争劇を大系化する。具体的には、二年間の研究成果を踏まえて西南戦争劇の全体の傾向を詳らかにするとともに、演劇における戦闘場面のスペクタクルがいかに進化したのか、戊辰戦争から西南戦争

を経て、日清日露戦争に至る流れを整理する。

第四に、演劇における西郷隆盛の造形を分析する。これについては、西南戦争劇のみならず維新を題材とした「維新劇」をも扱うことになる。また新派をはじめとする歌舞伎以外の演劇も研究対象とする。

4. 研究成果

上演年表の作成、

研究の基礎として西南戦争劇および西郷隆盛が登場する演劇作品の上演年表を作成した。その結果をまとめると、西南戦争劇は終戦直後の明治 11 年に日本各地で上演されたが、明治 12 年を最後に上演回数は激減し、以後は約 20 年間に旧作新作合わせて 10 回程度小芝居で上演されたのみであった。これはいわゆる「キワモノ」らしい上演史といえるものである。

一方西郷隆盛が登場する演劇作品については、決定的な代表作といえるものは見いだすことができなかったものの、各時代にその時代を象徴する作品が上演されていた。そのトピックスとして、以下の通り 5 点に分類した。

- 1, 西郷が歌舞伎に初登場（明治 7 年「近世開港魁」）
- 2, 西南戦争劇の流行（明治 11 年「西南雲晴朝東風」「西南夢物語」「西南電報録」他多数）
- 3, 高安月郊作「江戸城明渡」（明治 36 年）
- 4, 岡本綺堂の西南戦争劇（大正 11 年「西南戦争聞書」「城山の月」）
- 5, 真山青果の「江戸城総攻」三部作および西南戦争劇

明治期の劇界に関する調査研究

黙阿弥および明治期の歌舞伎に関連して、広い視野で調査研究をおこない、二度の学会発表をおこなった。

第一に、河竹黙阿弥を中心に江戸歌舞伎の作者制度を分析、さらに明治期の「著作権登録」や「著作権裁判」にいたる流れを分析し、西南戦争劇が流行した当時の劇界の事情を詳らかにした。これについては国際ワークショップ「Japanese Theater, Publishing, Culture, and Authorship」（於 NY・コロンビア大学）において「歌舞伎の作者 幕末から明治を中心に」という題名で発表をおこなった。

第二に、西南戦争劇が流行した明治 11・12 年は、歌舞伎が西洋と接近した時代であることから、当時の劇界の事情を西洋との関わりを通じて詳らかにした。これについては、日仏演劇学会「Corps et message-De la structure de la traduction et de l'adaptation」において「歌舞伎における翻案 河竹黙阿弥の作品を中心に」という題名で発表をおこなった。

明治 11 年の西南戦争劇の分析

上記「上演年表の作成」の結果、西南戦争劇は終戦直後の明治 11 年に日本各地で上演されていたことが明らかになったことから、各作品について調査分析をおこない、当時の西南戦争劇を詳らかにした。特に扱った作品は以下の 8 作である（他にも数作確認でき、明治 11 年には「西南夢物語」が上方を中心に 4 回再演されている）。

- 1, 明治 11 年 1 月 1 日新富座「児模様曾我館染」の「だんまり」（河竹黙阿弥）
- 2, 同年 1 月 8 日喜昇座「東錦彩見勢繁喜」（作者未詳）
- 3, 同年 2 月 28 日新富座「西南雲晴朝東風」（河竹黙阿弥）
- 4, 同年 3 月 8 日大阪戎座「西南夢物語」（勝諺蔵）
- 5, 同年 3 月 11 日名古屋橋座「西南電報記」（作者未詳）
- 6, 同年 3 月 31 日甲府三井座「形錦織出」（作者未詳）
- 7, 同年 4 月 5 日桐座「館模様岩尾初桜」のうち「だんまり」（作者未詳）
- 8, 明治 12 年 4 月 16 日市村座「鹿児島銘全伝記」（竹柴金作）

その結果、以下の傾向を明らかにした。

- A: 時事性が強く新聞種と強調
- B: スペクタクルの程度は作品により異なるが戦争を前面に打ち出した構成。ほぼ全作に出征の場面がある。
- C: 役作りに軍服の着こなしを重視。
- D: 軍人らしさの表現として漢語を使用、方言は一般的ではない。

総括すると、写実であることが重視され、歌舞伎は報道メディアとしての役割を果たしていたといえる。こうした共通点のなかでも、扮装・言語・戦闘表現のいずれでも写実を特に徹底したのが「西南雲晴朝東風」であり、本作が西南戦争劇の極めつけであるとした評価（申請者の先行研究による）を裏付ける結果が得られた。

演劇における西郷隆盛の造形の分析

上記「西南戦争劇の分析」の成果を踏まえつつ、西郷が活躍したもう一つのトピックスである明治維新を題材とした「維新劇」をも研究対象とし、演劇における西郷隆盛の造形の調査分析をおこなった。演劇ジャンルも歌舞伎の他に新派や新国劇なども研究対象とした。今日まで受け継がれる「西郷さん」と「さん」付けで呼ばれるような西郷隆盛の親近感がいかにして形成されたのか、演劇作品を通じて詳らかにした。

まず、西郷が演劇に初登場した明治7年「近世開港魁」においては景清や俊寛ながら類型的な歌舞伎の主人公であり、その個性は描かれていない。その萌芽は終戦直後に上演された黙阿弥による西南戦争劇「西南雲晴朝東風」であった。他座の芝居とは異なり、平生姿を強調して薩摩なまりを用い、九代目団十郎が見事に演じた。その後は明治33年まで西郷は「西南戦争劇」に幾度か登場しているが、いずれも終戦直後の「西南戦争劇」の造形を受け継いでおり、「維新劇」も併せて西郷のターニングポイントといえる作品は見られない。

そしてこの間新派が台頭し、明治31年には上野の西郷像が竣工する。以後親しみやすさを強調した造形が本格的に始まるが、それは「西南戦争劇」ではなく、江戸を回顧する「維新劇」でこころみられる。明治36年には川上一座の「江戸城明渡」において、台詞にリアル過ぎぬ方言が用いられる。川上音二郎扮する勝海舟の江戸弁が不評の一方で高田実扮する西郷の薩摩弁は受け入れられたが、上野の銅像のイメージの強さが障害となって風貌の再現は成功しなかった。その後、西郷の造形は歌舞伎新派を問わず模索されてゆく。

大正7年、持ち前の貫禄と維新の再現力をもって西郷を演じたのが二代目市川左団次であった。風貌が大絶賛され、薩摩弁も好評だった。しかし内面の表現については当時の劇評はほとんど言及していない。ここで歌舞伎の西郷の雛型といえるものが完成するが、最初の西郷役者である九代目団十郎への言及は一切無く、西南戦争当時の西郷との断絶がうかがえる。そして大正11年に岡本綺堂「西南戦争聞書」が上演され、情を強調した綺堂と西郷役者左団次によって西南戦争物にも親しみやすい西郷が持ち込まれることになった。

以上をまとめると、「キワモノ」としての「西南戦争劇」が明治30年代半ばに断絶し、それを境に西郷の描写が大きく変化していた。その理由として上野の銅像の影響を見いだせた。すなわち明治初年から受け継がれた西郷の造形が銅像完成後は通用しなくなったため、強力な視覚イメージが演劇にもたらされ、以後異なる役作りが必要となったのである。

本研究によって、西南戦争劇の詳細とその後の戦争劇への影響が詳らかになり、戦争劇研究を発展させることができた。加えて、西郷の造形が確立する経緯を詳らかにしたことは、戦争劇の研究に止まらぬ成果であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 埋忠美沙「歌舞伎の西郷隆盛」『歌舞伎 研究と批評』64号、歌舞伎学会、2019(掲載決定)

〔学会発表〕(計3件)

1. 埋忠美沙「歌舞伎の作者 幕末から明治を中心に」コロムビア大学国際ワークショップ「Japanese Theater, Publishing, Culture, and Authorship」(国際学会)2018
2. 埋忠美沙「歌舞伎における翻案 河竹黙阿弥の作品を中心に」日仏演劇学会「Corps et message-De la structure de la traduction et de l'adaptation」(国際学会)2018
3. 埋忠美沙「歌舞伎の西郷隆盛」歌舞伎学会大会、2018

〔図書〕(計1件)

1. Sakae Murakami-Giroux, Sandra Schaal (eds), (Editions Philippe Picquier, Arles,) 『CORPS ET MESSAGE : De la structure de la traduction et de l'adaptation,』2019, 320p

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。